



生き生きとした自分を見つめるための実用生活誌

はじまりのページ

Shukokai-Magazine The page of beginning

2016 Summer NO.36

名医がアドバイス

身近で“危ない”病気の防ぎ方

第2回 怖い“心疾患”は、
こうして防ぐ

ダイジェスト版

特報

予防の概念を超えた新しい“がん予防セラピー”
プリ

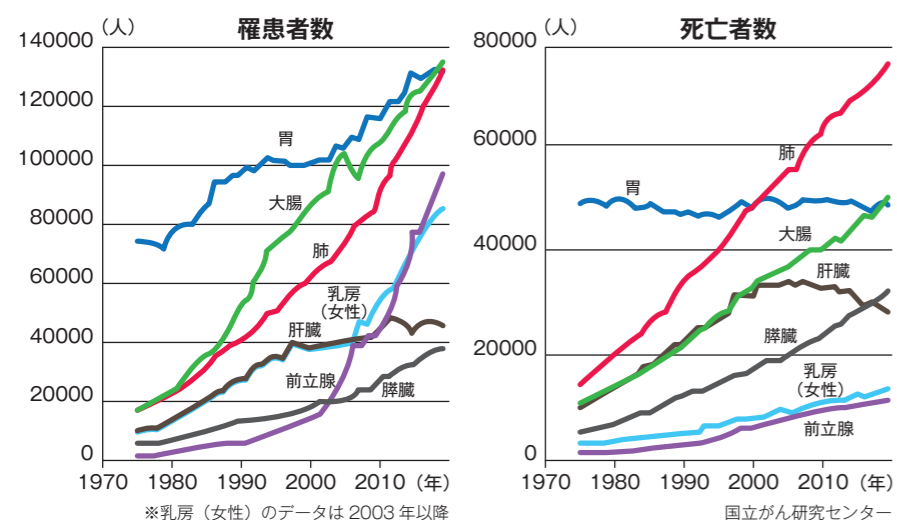
『Pre - HITV療法』

いよいよ受診始動

SHUKOKAI

ダイジェスト版

■ 図1 がん死亡者数・罹患者数の推移



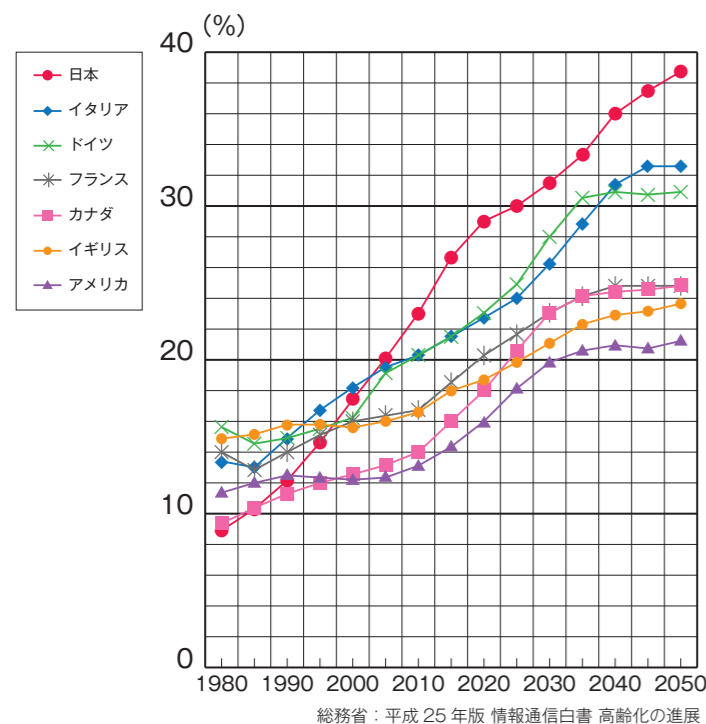
患者数・死亡者数ともに増加していますが、IARC（国際がん研究機関）によると、がんの死亡者数の65%は発展途上国の人たち。先進国では、むしろ減少傾向にあるといわれています。一説によると、日本人のがんによる死亡者数は、米国の1.65倍だといえます。

「日本では2007年に65歳以上の高齢者人口が総人口の21%を超え、超高齢社会へ突入しました。この高齢化の波は、他国に類を見ないスピードで進

『Pre-HITV療法』 いよいよ受診始動

珠光会グループは本年秋を目途に、がんに対する予防・治療の既存概念を超える新しい「がんプロジェクト」——「Pre-HITV療法」をスタートさせます。今回の特集は実施に先駆け、その概要を解説します。

■ 図2-1 世界の高齢化率の推移 (G7の場合)



展し、今から14年後の2030年には3人に1人が高齢者という人類初の「超高齢社会」に突入します。(図2を参考)

超高齢社会では75歳以上の後期高齢者が、現在より1000万人ほど増加し、このうちの40%が一人暮らし、そして、10%が認知症を患うと予測されています。日本におけるがんの増加は、この高齢化現象がもたらす当然の帰結だといえるでしょう(蓮見先生)

がんは、日本では生活習慣病

のひとつとされ、心疾患、脳血管疾患とともに日本人の3大死因を成しています。生活習慣病は食事、運動、ストレスなどのリスクが積み重なって発症に至りますが、がんの場合はそれらの蓄積が、遺伝子にダメージを及ぼすことが発現のきっかけになると考えられています。結局、リスクの蓄積が多ければ多いほどダメージも深刻なものとなり、がんの発生率も高くなるわけですから、お年を召した人ほどがんになりやすいのは道理。

■ 図2-2 各国の国民平均年齢順位表

順位	2015年	年齢(歳)	2030年予想	年齢(歳)	2050年予想	年齢(歳)
1位	日本	46.5	日本	51.5	その他の領域	56.2
2位	ドイツ	46.2	イタリア	50.8	韓国	53.9
3位	仏領マルティニーク	46.1	ポルトガル	50.2	日本	53.3
4位	イタリア	45.9	スペイン	50.1	ボスニア・ヘルツェゴビナ	53.2
5位	ポルトガル	44.0	ギリシャ	48.9	シンガポール	53.0

国際連合人口部 2015

がん大国への道を突き進む日本

国立がん研究センターの発表(2016年5月)によると、2014年にがんで死亡した人の総数は368,103人(男性218,397人、女性149,706人)。男女ともに増加し続けており、2015年の予測値^{※1}は、おおよそ370,900人に達するものと思われます。(図1を参考)

また、新しくがんと診断された人の数(罹患者数)も増加の一途をたどっており、2011年では男女計851,537人だったのが、2015年の予測値では982,100人。——2人に1人ががんになり、3人に1人はがんで死す。これが日本の抱える「がん社会」の現状なのです。

米国法人 蓮見国際研究財団理事長の蓮見賢一郎先生は、がん患者の増加について次のように語りました。

「2015年の予測値によると、日本で一番患者数の多いがんは、大腸がんです。次に、肺がん、胃がん、前立腺がん、乳房がんの順で続きますが、著しい伸びを示しているのが男性の前立腺がん」と女性の「肺がん」です。

前立腺がんは、欧米では30年以上前から、男性の罹患者率が高いがんとして有名でした。がん検診の普及により、1992年以降は死亡率が低下していますが、日本では今後増加傾向にあるでしょう。

また、国立がん研究所の多目的コホート研究^{※2}では、肺がんの発生に「女性ホルモン」が影響を及ぼしている可能性が指摘されています。もちろん、それだけが、女性に肺がんが増加する原因ではありませんが、女性ホルモンと肺がんの関係は、今後も注視する必要があるでしょう」

こうしたがんの増加は、世界的に見られる傾向かといえ、決してそうではありません。確かに世界的にもがんの

治療効果も期待できる一歩進んだがん予防
——「Pre-HITV療法」。この療法の登場は、珠光会グループの治療体系に、どのような波及効果をもたらすのでしょうか。

「珠光会の根幹を成す治療はハスミワクチンとHITV療法です。ハスミワクチンは治療と予防のバランスの取れた万能型ワクチン。HITV療法の今まで申し上げてきた通り、再発・進行がんの「治療」に特化したがんワクチンです。

一層充実する珠光会の「治療体系」

治療効果も期待できる一歩進んだがん予防
——「Pre-HITV療法」。この療法の登場は、珠光会グループの治療体系に、どのような波及効果をもたらすのでしょうか。

「珠光会の根幹を成す治療はハスミワクチンとHITV療法です。ハスミワクチンは治療と予防のバランスの取れた万能型ワクチン。HITV療法の今まで申し上げてきた通り、再発・進行がんの「治療」に特化したがんワクチンです。

過程から樹状細胞に関する部分だけを抜き出し、ブラッシュアップしてがん予防に用いようというもの。この点が「予防セラピー」と呼ばれる所以なのです。(図4)

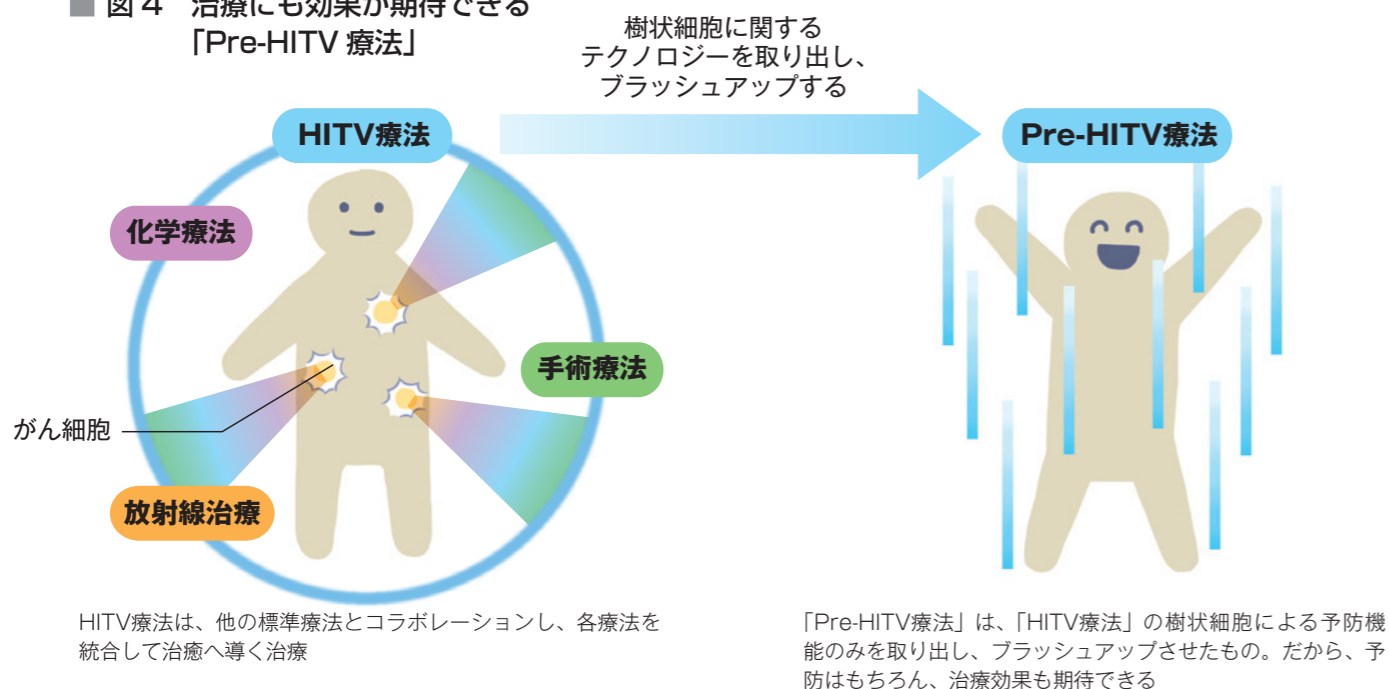
「Pre-HITV療法」は、通常のHITV療法とほぼ同様の手順を踏んで、樹状細胞を体内へ注入します。体中へ散った多量の樹状細胞は、がん抗原を見つけるや否やターゲット情報を認知し、速やかにCTLへ攻撃命令をくだします。

その情報伝達力、攻撃力は通常の免疫システムによるものをはるかに凌駕し、むしろ「治療」と呼ぶ方がふさわしいほどです。私たちが「Pre-HITV療法」に「予防セラピー」というサブタイトルを付けたのは、そんな理由からなのです」(蓮見先生)

■ 図3 HITV療法の2つの要点



■ 図4 治療にも効果が期待できる「Pre-HITV療法」



HITV療法は、他の標準療法とコラボレーションし、各療法を統合して治療へ導く治療

「Pre-HITV療法」は、「HITV療法」の樹状細胞による予防機能のみを取り出し、ブラッシュアップさせたもの。だから、予防はもちろん、治療効果も期待できる

「Pre-HITV療法」は、「HITV療法」の樹状細胞による予防機能のみを取り出し、ブラッシュアップさせたもの。だから、予防はもちろん、治療効果も期待できる

「Pre-HITV療法」は、「HITV療法」の樹状細胞による予防機能のみを取り出し、ブラッシュアップさせたもの。だから、予防はもちろん、治療効果も期待できる

「Pre-HITV療法」は、「HITV療法」の樹状細胞による予防機能のみを取り出し、ブラッシュアップさせたもの。だから、予防はもちろん、治療効果も期待できる

※1 予測値：国立がん研究センターが「全国がん罹患モニタリング集計のがん罹患患者数全国推計値」など複数のデータを用いて計算した値。実測値とは異なる
※2 コホート研究：特定の要因に侵された集団と侵されていない集団を一定期間追跡し、研究対象となる疾病の発生率を比較することで、要因と疾病発生との関連を調べる観察的研究

皮肉にも日本は平均寿命の進展に比例し、がん大国への道を一直線に突き進んでいるわけだ。

「治療」効果も期待できる「予防」
——「Pre-HITV療法」

今後益々深刻の度を増すであろう「がん」。その憂慮を払拭すべく、珠光会が今秋(予定)から実施するまったく新しい「がん予防セラピー」が、「Pre-HITV療法」(Prevention HITV Therapy)だ。

蓮見賢一郎先生は、この画期的な予防セラピーについて、次のように述べました。

「ご存じの通り、珠光会ががんに対する免疫療法の先駆けとして、70年余りの歴史を有しています。その珠光会が、がんで亡くなる患者様をひとりでも多く救済したいという一念で開発した免疫療法が「HITV療法」です。

HITV療法の専門クリニックとして、ICVS東京クリニックが誕生したのは2008年。以来、8年余りの歴史のなかでさまざまな症例に挑み、その都度、治療法自体にも改良を加え、現在までにステージIVの末期と診断された患者様100名以上のがんを治療へ導き、社会復帰させるまでに進化いたしました。HITV療法は今後も研鑽を重ね、さらに精密な治療へと仕上げる覚悟ですが、この治療法を施術するなかで見えてきたのが、樹状細胞を使ったがん予防セラピー、すなわち「Pre-HITV療法」なのです」(蓮見先生)

HITV療法は主に2つの要点から成り立っています。ひとつは樹状細胞を直接がん腫瘍へ注入すること。もうひとつは標準治療との組み合わせで、相乗効果を発揮すること。(図3)

樹状細胞は免疫システムの司令塔とも呼ばれる細胞。この細胞ががん抗原をどう認知するかによって、誘導される兵士——CTL(キラー細胞)の攻撃力も変わってきます。認知が甘ければ攻撃も曖昧。明確なら鋭く研ぎ澄まされるのです。

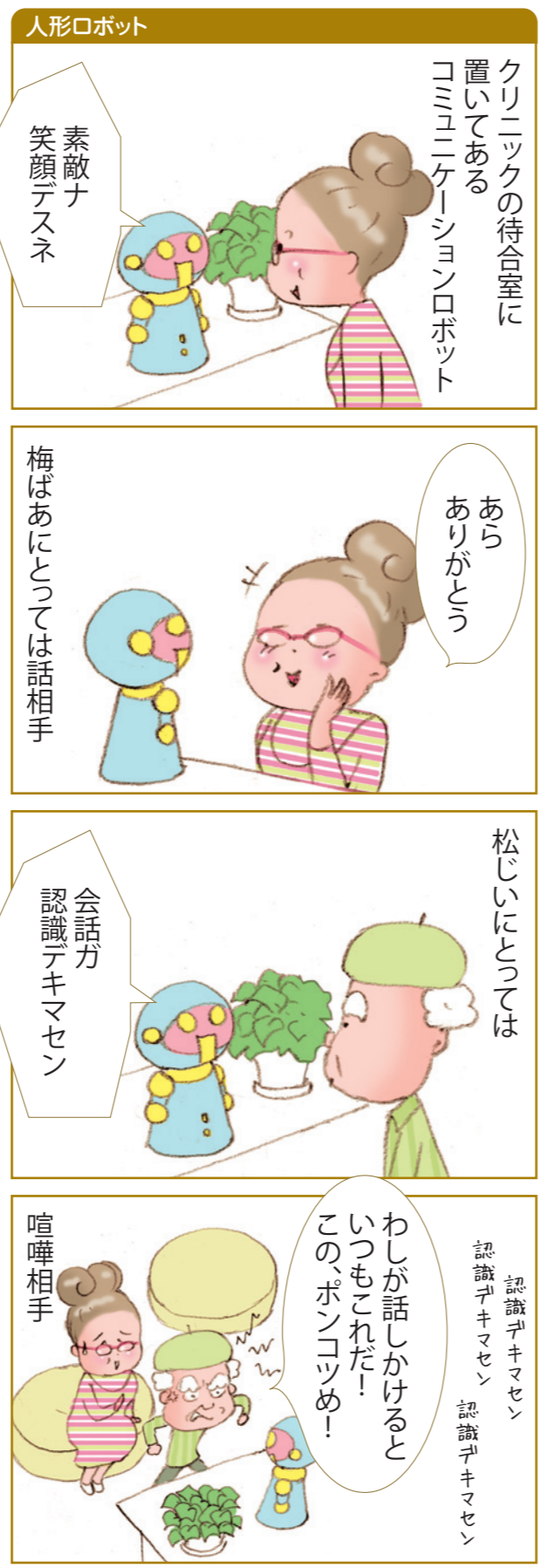
がん抗原の認知は、他の免疫療法では樹状細胞を体外に取り出し、ペプチドなどを用いて行われますが、HITV療法では、樹状細胞をアジュバントとともに、直接がん腫瘍へ注入することで認知させます。つまり、樹状細胞をダイレクトに抗原に触れさせることで、より実践的な情報を取り込ませるわけです。その分、抗原認知が精密になるため、確実に攻撃対象を捉えたCTLを、活発に誘導できるようになるわけです。

HITV療法は、こうした樹状細胞の特別な働きに加え、放射線療法や化学療法など、他の標準治療をコラボレーションさせることで、体中のがん細胞に壊滅的な打撃を与えることを可能にしました。どの時機にどんな治療をコラボさせるかは、各症状の分析、蓄積データ、HITV療法担当医の経験などを加味して判断されますが、わずか8年のうちに、末期患者100名以上を治療へ導いた実績を鑑みれば、それがいかに高性能な医療技術であるかは、推して知るべしでしょう。

「Pre-HITV療法」は、このHITV療法の

※3 ICVS 東京クリニック：〒102-8578 東京都千代田区紀尾井町4-1 ニューオータニ新紀尾井町ビル4F Tel 03-3222-0551
※4 がん抗原：免疫細胞が攻撃の目印とするたんぱく質
※5 ペプチド：複数のアミノ酸がつながったもの
※6 アジュバント：樹状細胞の活性化などを促す物質。がんワクチンなどとともに用いられる
※7 BSL-48Clinic：〒102-0094 東京都千代田区紀尾井町4-1 ニューオータニガーデンコート1階 Tel 03-3556-1948

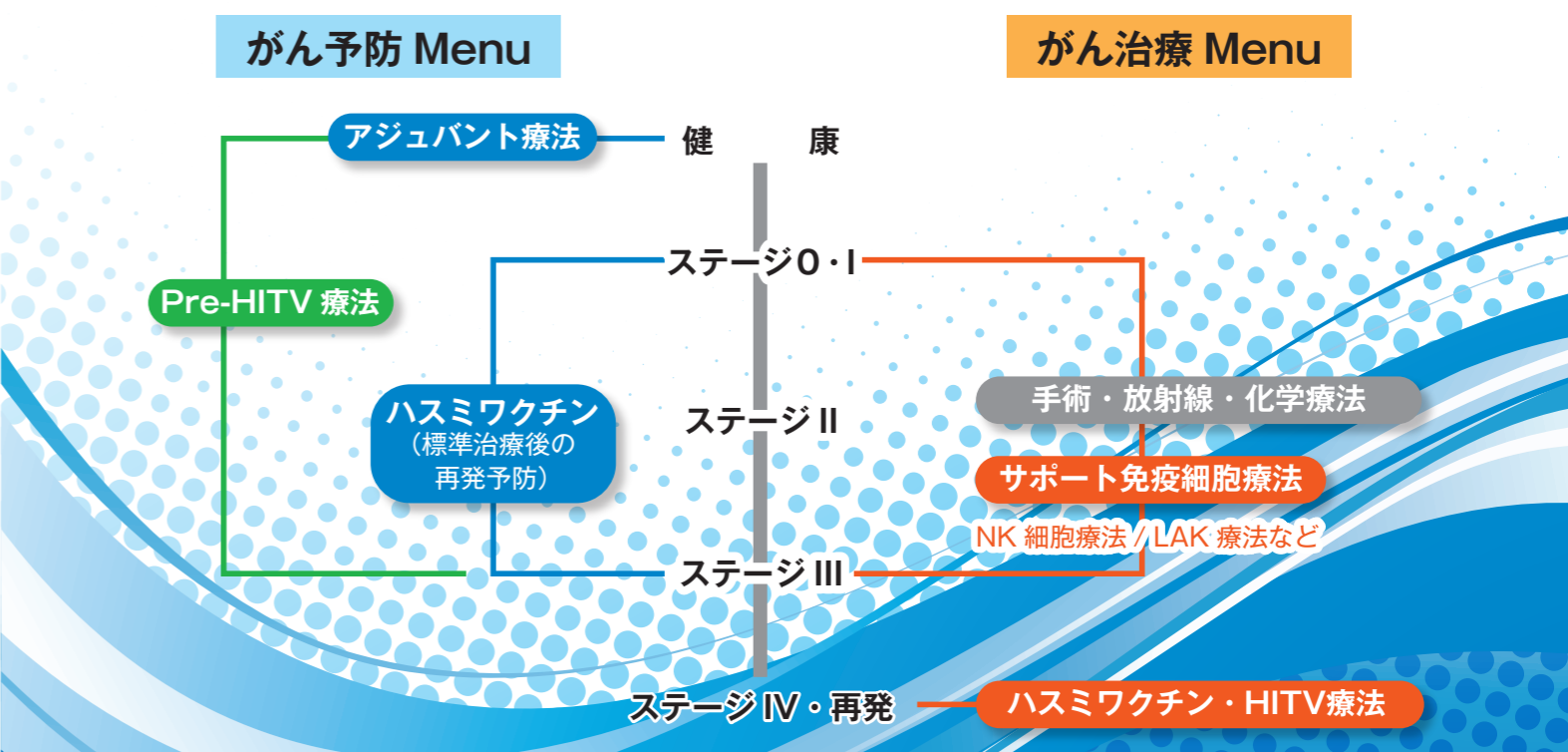
小林 裕美子
マンガ家/イラストレーター
東京造形大学・デザイン科卒業。イラストレーターとして、実用書や児童書、雑誌、WEB媒体、新聞等に挿絵やマンガを描いている。『美大デビュー』(ポプラ社)、『もちもち』(徳間書店)、『親を、どうする?』(実業之日本社)、『私、産めるのかな?』(河出書房新社)、『親が、倒れた! 桜井さんの場合』(新潮社)、『産まなくてもいいですか?』(幻冬舎)など著書多数。



がん化予防に対しては、「アジュバント療法」が用意されています。ハスミワクチンの骨格となるアジュバントを活用し、常に若い時の免疫力を保っておくことで、健康の維持・増進を図ろうという療法です。皮膚に貼るだけで効果が見込める「パッチ型」(19頁参照)もあるので、普段の生活の中で利用することができます。
一方、今は健康な状況でも、年齢、家族歴や生活環境などから、がん化に対してハイルスクな立場にあると感じている場合は、「Pre-HITV療法」をお勧めします。両者ともがん化予防に優れた効果を有していますが、経済的な問題を克服できるならば、Pre-HITVの方が、より高い予防効果を発揮するからです。
また、特にステージⅢ期で治療を受けた後は、再発リスクも極めて高いため、Pre-HITV療法が有効です。
「術後再発予防も含め、がん全般の予防に効力を発揮するPre-HITV療法」により、珠光会の治療体系は万全なものになったといえるでしょう。

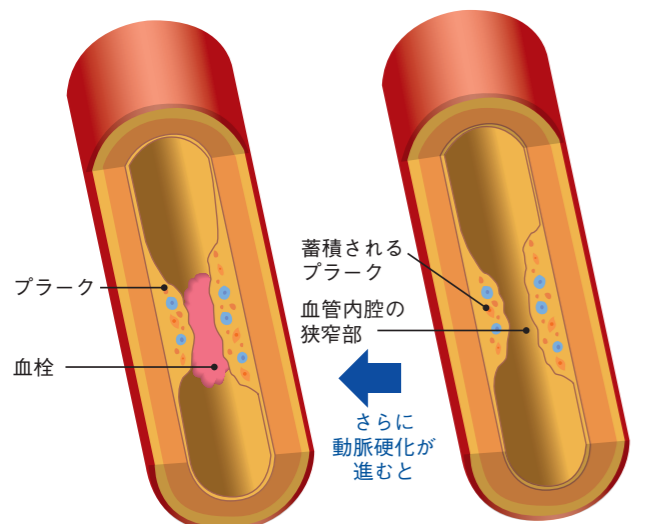
「免疫療法」は「がんの苦痛のない、生き生きとした社会」を創造する
その70余年にわたる願いを叶えるために、新しい療法を始動させる珠光会。医師やスタッフの不屈な思いが、私たちの健康を一層輝かせ、豊かな人生へと誘ってくれるに違いありません。
「Pre-HITV療法」はBSL48Clinicで実施予定ですが、施術には、血液成分分離装置などの大型機材が必要となります。そのためスペースの関係上、BSL48Clinicの機能を一部移転させる必要が生じ、現在、東京の阿佐ヶ谷(以前の珠光会診療所)に「BSL48珠光会Clinic(仮称)」を開所する方向で調整を進めています。
また昨年からは、HITV療法に関する国際的な関心が高まり、海外からの患者さんが急速に増加しています。同様にPre-HITV療法についても、海外からの受診希望者の増加が予想されることから、現在のBSL48Clinicを、「BSL48インターナショナル・クリニック(仮称)」という名称に変更することも検討されています。

図5 珠光会の治療体系



伊東春樹先生は、9月17日(土)に開催される「紀尾井フォーラム・定期健康講座」で、「心臓病」をテーマにご講演されます。事例を挙げながら検査・診断・治療・予防に至るまでわかりやすく解説いたしますので、ご家族、ご友人をお誘いあわせのうえ、ぜひご来場ください。お申し込みは21頁をご覧ください。

図2 動脈硬化を起こした血管



プラークが血管内腔を一層狭くし、血栓が動脈を詰まらせる
血管が硬くなり、ドロドロのプラークが形成される



(財)日本心臓血圧研究振興会附属榊原記念病院顧問

伊東 春樹 先生

Profile
1949年東京生まれ。1975年東京医科歯科大学卒業。同大学医学部第二内科入局。1982年シカゴ大学留学。1984年東京医科歯科大学医学部第二内科助手、講師。千葉社会保険病院内科などを経て、2002年心臓血管研究所付属病院副院長に就任。2005年6月上職を辞し、7月より榊原記念病院副院長、2015年より現職。医学博士、内科認定医、臨床薬理認定医指導医。循環器専門医、日本医師会健康スポーツ医。心臓リハビリテーション認定医。日本心臓リハビリテーション学会副理事長。日本臨床生理学会理事、日本心臓病学会特別正会員 (FJCC)。アメリカ心臓病学会正会員 (FACC)。ヨーロッパ心臓病学会正会員 (FESC) など。著書は「心臓病のリハビリと生活」(主婦と生活社) など多数。

の原因でプラークが破れた場合、冠動脈内にできる「血栓」により血流が止まってしまう事態、すなわち「心筋梗塞」に陥ります。冠動脈が閉塞すると、40分前後で心筋が壊死しはじめますが、壊死の部分が広がると心臓の収縮・拡張ができなくなるため、命にかかわる重篤な状態に至るのです。——**自覚症状は、胸の痛みや圧迫感以外はないのでしょうか?**
伊東先生 「患者さんがよく訴えられるのが、階段を上ると胸が締め付けられるように痛くなる。重いものを持ち上げたり、坂道を歩いたりすると胸が苦しく痛むが、安静にしていると楽になる」という症状です。こういった場合は「労作狭心症」を疑います。

身近で“危ない”病気の防ぎ方 第2回

ダイジェスト版

怖い“心疾患”は、こうして防ぐ

心臓に生じた“血液の循環不全”を原因として引き起こされる病気の総称を「心疾患」といいます。——こう説明すると、ややこしくてピンと来ない方もいらっしゃるかもしれませんが、「狭心症」「心筋梗塞」……と具体的な病名を挙げれば、なるほど! と思われる方も多いのではないのでしょうか。今回の「身近で“危ない”病気の防ぎ方」は、最悪の場合“死”へも直結しかねない心疾患について、トップ・ドクターの伊東春樹先生に解説していただきます。

● 上昇し続ける死亡率

——厚生労働省の「患者調査」(平成26年)では、心疾患の総患者数は172万9000人とされています。全体としては増加傾向にあるのでしょうか?

伊東先生 「そうです。3年前の調査より、おおよそ10万人ほど増加しています。同じく厚生労働省の人口動態統計の概況によると、平成26年1年間の死因別死者数のうち、心疾患(高血圧を除く)による死亡者は19万6926人——これは、悪性新生物(がん)に次ぐ第2位の数字です。しかし、がんは乳がんや胃がん、白血病……等々、さまざまな臓器や組織にできるがんの総数ですので、部位別の死亡原因では、圧倒的に心臓に関する疾患(心疾患)が多数を占めるわけです」

——ひと口に心疾患といっても、さまざまな病気があると思いますが、心疾患の概念をご説明ください。

伊東先生 「心疾患には、脈の打ち方に乱れが生じる不整脈、先天性の心臓病、心筋(心臓の筋肉)や心膜(心臓を包む結合組織性の膜)の病気など、さまざまなものがありますが、大多数は、虚血性心疾患」と呼ばれる病気です。

心臓は一日に約10万回も収縮・拡張を繰り返し、全身に血液を送り出す「ポンプ」の役割を果たしています。心臓に酸素や栄養を含む血液を送り込んでいるのは、冠動脈、という血管ですが(図1)、虚血性心疾患とは、この冠動脈が動脈硬化などで狭くなったり(狭窄)、つまったり(閉塞)して、心筋に血液が行けなくなったことが原因で起こる病気

のことです。具体的には狭心症や心筋梗塞、虚血性心不全などです」

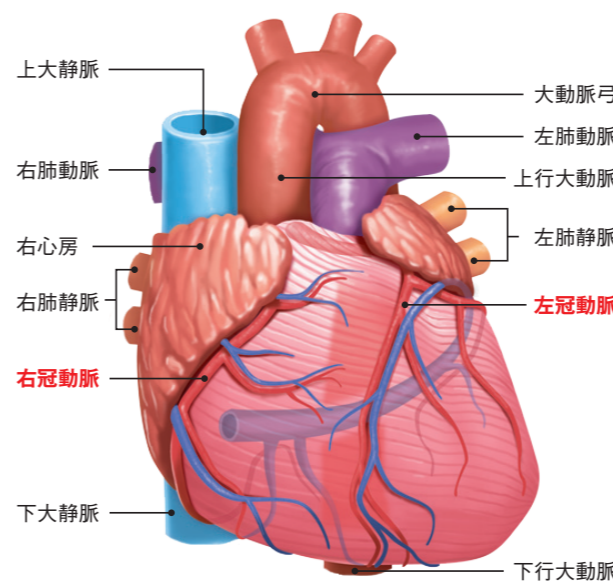
● 「心疾患」の見極め方と予防法

——動脈硬化と虚血性心疾患の関係について、もう少し詳しく教えてください。

伊東先生 「老化によって血管の弾力性が失われたり、血管の内壁に悪玉コレステロールなどの塊(プラーク)が蓄積されたりして、血管の内腔が狭くなった状態——これが動脈硬化です(図2)。

冠動脈に動脈硬化が生じると、血流が悪くなつて心筋に必要な血液が行けなくなることから、胸に痛みや圧迫感を感じるようになります。この段階が、狭心症。さらに動脈硬化が進み、なんらか

図1 心臓の構造



痛みや圧迫感、胸以外にも心窩部(みぞおち)や肩、頸、背中、奥歯や下顎などに感じる場合があります。こうした予兆となる症状なしでも、いきなり襲いかかってくるのが、心筋梗塞です。心筋梗塞の痛みは今まで感じたことがないほど激甚で、焼け火鉢を胸に突き刺されたような痛み」と表されます。心筋梗塞では亡くなる方の半数以上が、発症から1時間以内に集中していますので、一刻も早い受診が必要なのはいうまでもありません。

虚血性心疾患の症状は、血管の狭窄が75%から90%ぐらいまで進まないといわれないとわかってはいますが、まったく無症状のまま、突然心筋梗塞に至る場合の方が多いためです。また、糖尿病患者の場合など、痛みを感じないこともあります。症状の強さと病気の重症度は必ずしも一致しませんので、異常を感じたら医師の診断を仰ぐことが重要です」

——**虚血性心疾患はどうやって防げばいいの。日常生活の注意点を教えてください。**
伊東先生 「虚血性心疾患の予防は、詰まる所、動脈硬化の予防ですので、特に重要なのは生活習慣の改善でしょう。①適切な運動を行う ②塩分を控えるために ③砂糖や果糖類は控える ④野菜を多くとる ⑤大豆製品や食物繊維を多くとる——などを心掛けてください。また、禁煙することももちろん、過度のストレスを避けるなども重要な心得です。

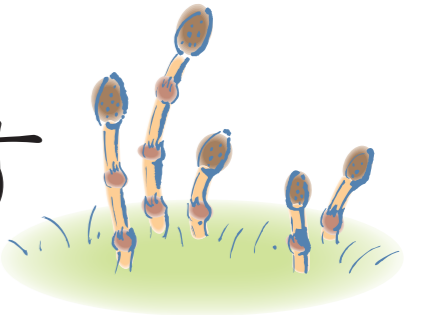
動脈硬化を予防できれば、虚血性心疾患のリスクは必ず減らせます。ある日突然命を奪われないためにも、日常生活の改善に努め、健康な毎日をお過ごしください」

※1 虚血性心不全: 血管の狭窄により、心臓の筋肉に十分な血液が届かなくなり、収縮力が弱まって全身の臓器に必要な血液量を送ることができなくなった状態
※2 血栓: 体内を巡る血液が固まってできた塊

※3 労作狭心症: 運動したり興奮したりした場合、心臓に負担がかかることで起こる狭心症。胸痛を伴う

がん**に**克**つ**て生きる 第**2**回

笑顔が生み出す “治癒”の力



広島市
「つくし会」のみなさま



中国地方におけるハスミワクチンの拠点——永山医院（広島市）には、二つの患者会があります。ひとつは先代院長の永山多寿子先生を中心とした「すぎな会」。もうひとつは現院長で永山先生の実娘、汐見千寿先生が創設した「つくし会」——。今回のドキュメンタリーは、誕生して間もない「つくし会」の元気いっぱいな活動をレポートします。

春を告げる つくし会の会

永山医院が広島市の地に開院したのは、今から87年ほど前。先代院長の永山多寿子先生がお父様から医院を受け継がれたのが50年近く前だということです。その歴史は言わずもがなでしょう。

1985年（昭和60年）、永山先生はがんで苦しむ患者さん同士が心を寄せ合い、励まし合うための集い——「すぎな会」を結成しました。スギナはトクサ科の多年草。原子爆弾で焦土と化した広島の大地に、いちばん先に顔をのぞかせたのがスギナだったことから、同じように力強い生命力で病気を克服したいという願いを込めて付けられた会名だといいます。

「新しい患者会を発足させるにあたり、スタッフ全員で会の名前を考えました。汐見千寿先生が語ってくれました。汐見先生は昨年の春に永山医院を継承し、以来院長として活躍しています。

「全員であれこれアイデアを出し合い、結局「つくし会」という名前に落ち着きました。春の訪れとともに顔を出すツクシは、スギナの子供——。体内に芽吹く生命の力で病気を追い払ってやる……という決意と、「すぎな会」のような大きな交流の場として成長したいという思いを重ね合わせて付けた名前です」（汐見先生）

先生）
「つくし会」の活動は、原則月1回。土曜の午後に参集し、毎回がんの治療や健康全般についてテーマを決め、見識を深めていきます。取材当日の話題は「AGE (Advanced Glycation End-products)」。AGEはたんぱく質に糖が結び付き、加熱されることで生じる「最終糖化産物」。老化の原因物質ともいわれています。

「見た目の老化は、体内の老化と無関係ではありません」と、汐見先生は解説しました。

たとえば、真皮や骨などを構成するコラーゲン分子をつなげる「架橋」がAGEに侵されると、皮膚がたるんで「老け顔」に見える場合が少なくないといえます。また、骨がもろくなることから「骨粗しょう症」の危険度も上昇します。さらに、AGEは高血糖が持続する状態で蓄積されるので、糖尿病患者と同じリスク、すなわち、心筋梗塞や脳梗塞にも陥りやすくなります。まさに、健康な肉体の「大敵」こそがAGEというわけです。

「高い免疫力を保持してがんと闘うためにも、AGEをためない生活を心掛けましょう」（汐見先生）

「今は2人に1人ががんになる時代ですので、（がんと診断されても）落ち込まないことが肝心です。医師に見放されても治療の選択肢はたくさんあります。しかし、どんな治療法を選ぶにしろ、治癒の“鍵”となるのは速やかな決断です。がんの進行は思いのほか早く、ぐずぐずしていると、あっという間に手の施しようのない状況に追い込まれます。苦しくとも、とにかく笑ってみてください。笑えば免疫力が上がり、心も明るくなります。心が明るければ、きっと前向きな判断ができるでしょう」



永山医院院長 汐見 千寿先生
Dr. Shiomi Chizu



は説明しました。AGEはたんぱく質と糖が加熱されて発生することから、パンケイキやステーキなど「焼き目」が付いた食品に多く含まれています。

「こんがり茶色く色づき、香ばしい匂いを漂わせる食べ物……聞いただけでとても美味しそうですが、AGEをため込まないためには、セーブする必要があります。また、食事には十分時間をかけるなど、健康的な生活習慣を身に付けることが大切です」（汐見先生）

NK細胞の「若返り効果」

この日、一番の盛り上がりを見せたのは、AGE計測の実演でした。計測に用いられたのは、汐見先生が用意した「AGE Reader（最終糖化生成物測定器）」という装置。皮膚・皮下の血管壁にたまったAGEを検出し、年齢値として表示する仕組みです。要するに、体内の年齢がわかってしまうわけですから、気分が高揚するのにもむべなるかなでしょう。

「やだあ〜、ウソ、こんなに高いなんて〜」

「あたし、そんなに老けてないですけど……」

錯綜する笑聲が告げるように、大方の

人は実年齢より高く表示されるようです。60歳ぐらいの人が80歳以上も高齢になることもあり、たまに実年齢よりも若く表示されると大爆笑。そうした悲喜こもごもの最中に、汐見先生の生活アドバイザーが、絶妙なタイミングで挿入されます。

「子育て中の人はストレスで(AGEが)高くなりますよ。お昼にアンパンを食べた人は要注意ですからねえ」

文字で書くときさほどでもありませんが、これに一言ぶついたらほう、しかし、よくよく聞くと大変キュートな広島弁が上乗せされると、途端にダイナミックな生命力を帯びて鳴り響くわけですから、取材している記者の心も何げにウキウキしてしまいます。もし、この場に第三者が紛れ込んだら、絶対に「がん患者さんの会」だとは思わないでしょう。それほど参加者の表情は、生き生きと輝いて見えました。

ところで、御年86歳の永山多寿子先生は、この装置で60歳代を記録したといいます。ご本人は――

「免疫療法で常に体内を、若く保っていたおかげ！」
とおっしゃっておられるそうですが、永山先生は長く「NK(ナチュラルキラー)細胞療法」を実践しておられるといえます。

刺激され、多量の神経ペプチド^{※1}が作り出されます。この物質が善玉ペプチドという物質に変化し、NK細胞を活性化させるのです。つまり、「つくし会」に参加したみなさんは、我知らず「天然のNK細胞療法」を実践していたのではないのでしょうか。「笑いヨガ」の指導員の資格を持つ汐見先生にしてみれば、当然の采配といえるでしょう。

「今は2人に1人ががんになる時代です」と、汐見先生はいいいます。

「けれど、むかしと違って(がん)闘う方法はたくさんあります。ですので、落ち込まないようにしてください。落胆して、免疫力が低下するのが一番よくない――」。

泣いても笑っても人生は一度きり……だったなら、笑って免疫力を上げ、みんな「治癒」へ向かって進みましょう(汐見先生)

屈託なく笑う汐見先生は、永山医院という大舞台でどんな活躍を見せてくれるのでしょうか。いずれにしろ、汐見先生の内面から溢れ出る「気」に当たっていると、なんとなくワクワクしてくるのは記者だけではないでしょう。汐見先生のエネルギーが遍在するつくし会を誘い、生命の広大な草原として芽吹かせていくことを願ってやみません。



「3年前、頭に“血管肉腫”という腫瘍ができました。永山先生からできるだけ小さくした方がよいといわれ、ハスミワクチンとNK細胞療法に併せて、放射線療法を行いました。そうしたら、腫瘍が取れてしまったのです。先日、妻と結婚50周年の“金婚式”も祝いました。まだまだ長生きしたいですね」

加藤 靖男さん(仮名) 70代



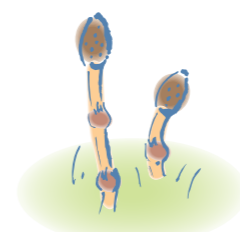
「母が80歳のとき大腸がんになりました。手術後、永山医院でハスミワクチンを施術してもらいながら、95歳まで長生きしました。そんなことがあったものですから、私も前立腺がんと診断されるや否や、こちらの病院へ駆け込んだ次第です。今はハスミワクチンとNK細胞療法で、元気に過ごしています」

鈴木 健太さん(仮名) 60代



「最初“脂肪肝”だと診断されましたが、のちに“悪性の腫瘍”だと判明しました。手術し、現在は永山医院で免疫療法を続けています。私に永山医院を紹介してくれた人は、80歳を超えても元気です。私もあやかりたいと思っています」

斎藤 信二さん(仮名) 60代



「7年ほど前に卵巣がんの手術を受けました。今年4月のCTの結果が思わしくなかったため、主治医から抗がん剤を勧められましたが、気が進まず、現在はハスミワクチンで治療に努めています。汐見先生からがん治療の多彩な選択肢についてお伺いしました。近々温熱療法に挑戦してみたいと思っています」

山田 真由美さん(仮名) 50代



天然の免疫療法とは？

「つくし会」を取材して、記者の心にもっとも鮮やかに残ったのは、参加者全員笑顔でした。

会の後半、親睦の意味を含めて、各自が病歴などを語るシーンがあったのですが、辛い病気の話であるにも関わらず、みなさまの瞳には明るく前向きな光が灯り、唇からは常に笑いが零れ落ちていました。

人間の脳(前頭葉)は、笑うことによって活発に働き出します。すると、免疫をコントロールする「間脳」という部分が

免疫力が上がるアドバイス

米国人 蓮見国際研究財団理事長 蓮見賢一郎

NK細胞療法では、採血3000に含まれる300万個ほどのNK細胞を、10億個から20億個に増やして体内へ戻します。免疫機能が格段に向上するわけです。NK細胞は「自然免疫^{※2}」に属する「兵士」ですが、免疫機構はもつひとつ「獲得免疫」というシステムを持っています。「つくし会」のみなさまの中にもNK細胞療法を受診されている方がいらつやいます。がん細胞を「駆逐する」という側面から考えた場合、獲得免疫に作用するハスミワクチンを組み合わせたことが、最良の方法だと思えます。免疫力を高めて、体全体の抵抗力を向上させるNK細胞療法、がん細胞自体に特異的に攻撃を仕掛けるハスミワクチン。この両輪が、がんから回復するための強いけん引力になってくれるはず。

※1 神経ペプチド：脳で作られる蛋白に似た分子の一種。神経伝達物質などとして働く

※2 自然免疫：常に体内を監視し、異物に対しいち早く攻撃態勢を整える、免疫の初期防衛ライン。強い破壊力を持ち、特定の敵に攻撃を仕掛けるのは「獲得免疫」

Macrobiotic Recipe | 免疫力を高めて元気になる マクロビオティック・レシピ



暑い季節には陰性な生野菜がおいしく感じられますが、塩と梅酢で陽性を補うとバランスがとれます。

野菜サンド漬け

- 材料(4人分)**
- キャベツ……………250g
 - キュウリ……………1本
 - 玉ねぎ……………1/4個
 - にんじん……………50g
 - 青じそ……………5～6枚
 - しょうが……………1片
 - 塩……………野菜の4%
 - 梅酢……………大さじ2
 - 紅しょうが……………適宜

- 作り方**
- 1 キャベツはしんをそぎ、キュウリは小口薄切り、玉ねぎは薄い回し切りに、にんじん、青じそ、しょうがは、細い千切りにする。
 - 2 四角い密閉容器にキャベツを2～3枚重ねて敷き、塩を振り、そのほかの野菜を混ぜて平らに置き、塩と梅酢を振る。再びキャベツを敷き、塩を振って同様に次々と重ね、密閉容器のフタを押しつけるようにぴったりと閉めて半日～1日おく。
 - 3 水が上がって漬かったら、容器から取り出して好みに切り分ける。紅しょうがの薄切りを飾る。

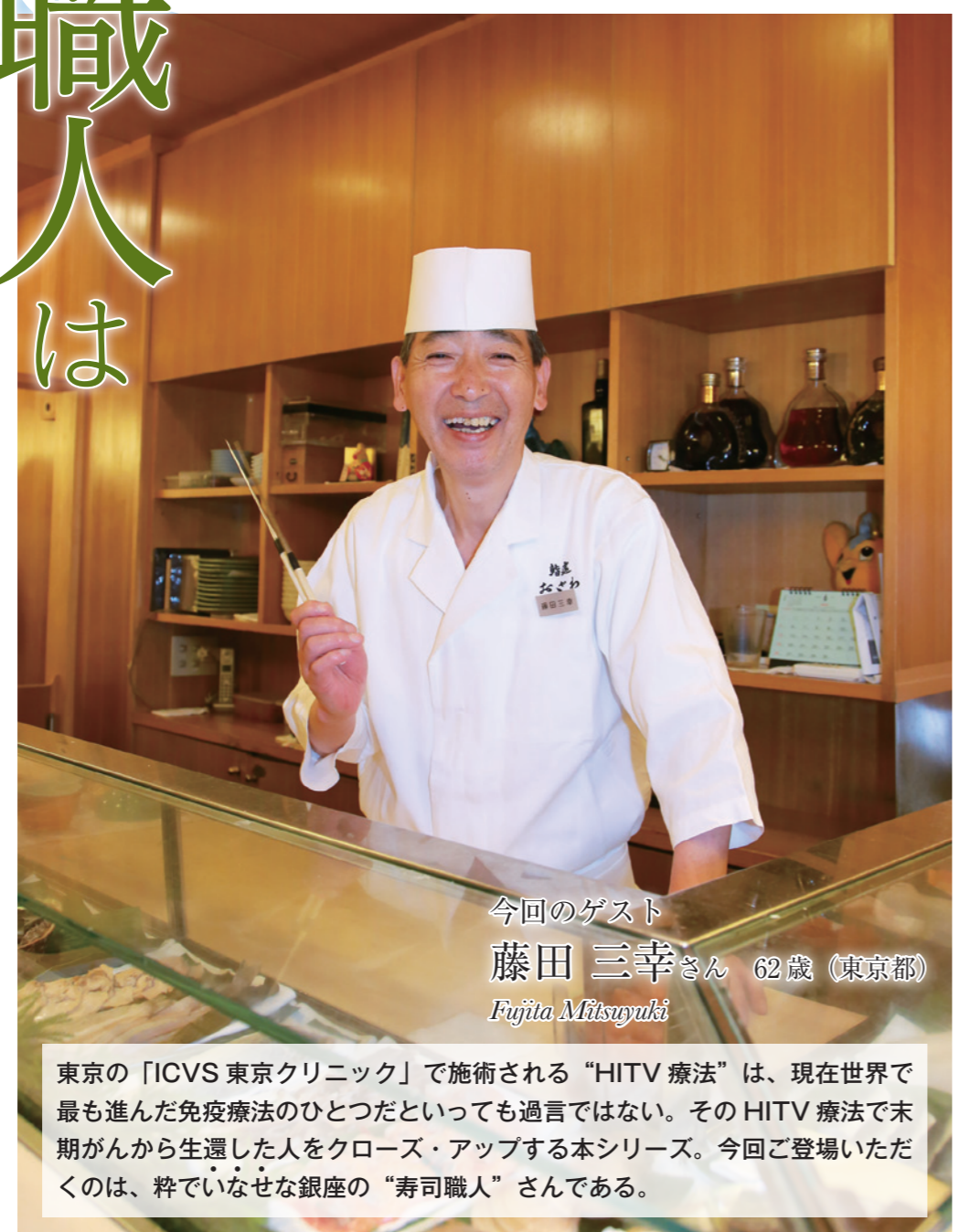
料理制作・中田はる リマ・クッキングスクール石神井教室主宰。故・桜沢如一（マクロビオティック創始者）の教えを受けた父の影響で、マクロビオティック料理を実践する。1981年、リマ・クッキングアカデミー師範科修了。1995年より石神井教室を開く。
リマ・クッキングスクール石神井教室 〒177-0041 練馬区石神井町8-30-7 TEL/FAX : 03 (3904)6130

Photograph ©菅原 史子 Coordinate ©大谷 祥子

治癒のヒント 末期から生還した “あなた”への質問

職人は

名医を知る



今回のゲスト
藤田 三幸さん 62歳（東京都）
Fujita Mitsuyuki

東京の「ICVS 東京クリニック」で施術される“HITV療法”は、現在世界で最も進んだ免疫療法のひとつだといっても過言ではない。そのHITV療法で末期がんから生還した人をクローズ・アップする本シリーズ。今回ご登場いただくのは、粋でいなせな銀座の“寿司職人”さんである。

築地の衝撃

東京は銀座の地に鮭の名店——「鮭處 おざわ」がある。今回の主人公、藤田三幸さんが同店の門を叩いたのは、20年前の平成8年だった。

「私は道産子でして。高校を中退して社会人になったのですが、最初は何をやれば良いのかわからなかったのです。そんな時、札幌の鮭屋で働いていた先輩が声を掛けてくれたのが、この道に入るきっかけでした」（藤田さん）

以来、札幌で鮭の修行に明け暮れた藤田さんだったが、江戸前の本場はなんと行っても東京……。憧れを胸に津軽海峡を渡ったのは昭和52年、23歳の頃だと語る。

「最初は東京で2年間鮭を勉強し、次に2年間大阪で和食を学んでから（札幌へ）帰ろうと思っていました。しかし、築地を目の当たりにした瞬間、考えが変わりましたね。」

札幌とは比較にならないほど広大な市場のなかに、全国から選りすぐりの海産物が所狭しと並んでいるのですから。すっかり圧倒されてしまって、大阪へ行く気も札幌へ戻る気も失せてしまいました」（藤田さん）
東京に骨を埋める覚悟で修行に打ち込んだ藤田さん。おざわに入店したのは40歳を超えた頃だったが、精進の手綱を緩めることはなかった。



「店によってまちまちでしょうが、うちに入店したら、まず8年間ぐらいは裏方です。（鮭を）握り始めても、技を自分のものにするには10年かかるので、一人前の職人になるには20年ぐらいは必要ですね」（藤田さん）

夜も昼もなく働き続けた藤田さんが健康保険組合から連絡を受けたのは、平成26年の夏。以前受けた健康診断の「再検」を突きつけられてしまったのである。

治療計画に「HITV療法」を加える

健康保険組合から指定された病院で、再検査を受けた藤田さん。しかし、問診担当医の説明がぐずぐずとして煮え切らなかつたという。江戸っ子かたぎの藤田さんにしてみれば、じれったい思いが高じるのもやむないこと。カッと頭に血をのぼせたまま、病院から退散してしまったそうだ。

「しばらくして、その担当医から手紙がきたんです。人間のイラストが描いてあり、腸のあたりにいくつかのしがついていた。けれど、こっちはまだカッカしてますから。こんなもんいいや、という感じで破って捨ててしまったのです」（藤田さん）
しかし、時間が経つにつれ、手紙のことが気になつてきたと語る。

店主の小澤諭さんから、都内の大学附属病院を紹介され、ただちに検査。結果は、大腸にあった4つのポリープのうち、直腸が悪性。同時に、肝臓にもすでに2カ所転移があることが判明したのである。
大病院に入院した藤田さんは、ここで再び小澤さんに助けられることになる。実は小澤さんの知り合いががんを患ったとき、蓮見賢一郎先生にお世話になったのだそう。そんなご縁で蓮見先生を紹介された藤田さんは、ICVS東京クリニックを受診。蓮見先生は大病院が計画している「手術」と「抗がん剤」に加え、「HITV療法」の施術を提案した。

「タフ」である理由

ICVS東京クリニックで施術されるHITV療法は、体内から抽出した樹状細胞^{※1}を直接がん腫瘍内へ注入する――

というシステム。

腫瘍内に届けられた樹状細胞は、敵となるがん細胞の情報を高い精度で認知し、CTL（キラーT細胞）^{※2}を活発に誘導することで、腫瘍自体をCTLの生産工場に変えてしまうという働きを示す。

CTなどの画像診断でしこりが発見される段階では、すでに目に見えない微細がん細胞が、血液に乗って体中を巡回している。これら「がんの芽」をつぶすには、全身に効果を及ぼす免疫療法が最適であり、HITV療法によって誘導されるCTLはとても高いクオリティを有している。

HITV療法は単独でがんを治療へ導く効果はもちろん、手術療法や化学療法の援護として用いる場合は、各療法後の「最終メンテナンス治療」として抜群の抑止効果を発揮するわけである。再発が恐れられるがんに対し、これほど安心をもたらす治療はないだろう。

「病院での精密検査の結果、肝臓への転移が見つかったので大腸は「腹腔鏡手術^{※3}」、肝臓は「開腹手術」で対処することになりました。腹腔鏡手術は6時間ほどかかりましたが無事終了。しかし、次の肝臓の手術医は顔を横に振ったといいますが、手術部位に帯状疱疹^{※4}ができてしまったのです」（藤田さん）

結局、藤田さんが肝臓がんを切除したのは、大腸がん手術の2か月後。時間はかかったが、結果的に人工肛門になることもなく、無事退院に至ったという。

「手術後3カ月は、念のため化学療法を続けねばなりませんでしたが、仕事は休めませんので、忙しいときは病院で抗がん剤治療を5時間ほど受け、店へ取って返して朝の5時までカウンターの立ちっ放しという始末でしたね」（藤田さん）

化学療法の副作用を考えれば、信じられぬタフネスぶりだが、思いのほか疲れは感じなかったという。

「抗がん剤はひとつの部屋で何人も同時に施術されるのですが、毛髪の抜けた人や青白い顔色の方が少なからず混じっていました。ところが、私は抜け毛もまったくなかったし、顔色も良く、気力も衰えなかった。多分、蓮見先生が処方してくれた「パッチ型アジュバント^{※5}」が効いたのだと思います」（藤田さん）

パッチ型アジュバントは皮膚に張るだけで免疫力の向上が期待できる貼付剤。仕事の中や寝たままでも使えるので、藤田さんのように忙しい方には、大変便利な一品だといえるだろう。

現在もHITV療法を定期的に受診し、再発予防に努めている藤田さん。取材の最



パッチ型アジュバント

後に面白いエピソードを聞かせてくれた。

「HITV療法では、細長い針を患部へ刺し入れるのですが、蓮見先生が施術するとまったく痛みを感じないのです。皮膚のどこをどう潜らせるのか……まったく神業ですね」（藤田さん）

一流の職人は一流の医師を知る――ということだろう。鮭は日本の食文化を代表する技の極み。藤田さんという生粋の職人が、これからも多くの「舌」を至福のひと時へ誘ってくれることは間違いない。

※1 樹状細胞：免疫機構の中心となる免疫細胞。体に侵入した異物を取り込み、攻撃を担うT細胞に抗原（攻撃対象のしるし）の情報を伝え、免疫反応を起動させる
※2 CTL（キラーT細胞）：細胞障害性T細胞。体内に侵入した異物を、酵素などを用いて殺傷する能力がある
※3 腹腔鏡手術：「腹腔鏡」というテレビカメラでお腹の中を見ながら行う手術。小さな創で済むため、術後の負担が少なく回復が早いことが利点

※4 帯状疱疹：子どもの頃罹った水痘と同様のウイルス（水痘・帯状疱疹ウイルス）が神経の付け根に残っており、免疫力の低下などを引き金として発現する病気。初期は赤い皮疹を作る
※5 パッチ型アジュバント：アジュバントとは「がんワクチン」などと共に用いられ、樹状細胞などの活性化を促す物質のこと。このアジュバントを免疫力向上のために用いる「アジュバント療法」は通常皮下注射で施術されるが、それを皮膚に貼るパッチ型に改良したものがパッチ型アジュバント。正式には「M-アジュバント」という

珠光会通信

Shukokai Communication

珠光会グループのお知らせ・情報・話題をお届けします

a Previous announcement & a Report

「紀尾井フォーラム・定期健康講座」の予告&報告

A course of lectures about healthy life in "Kioi Forum."

a Previous announcement

“第11回定期健康講座”のお申込みを受け付けています

「心臓病—— 危険なサインを 見逃さないコツ」(仮)

■ 講師：伊東 春樹先生
(公財) 日本心臓血管研究振興会附属神原記念病院顧問

■ 日時：9月17日(土)
午後2時～午後3時30分
※開場は午後1時30分

入場無料

『免疫療法コンシェルジュ』
<http://wellbeinglink.com/>

● “突然襲い掛かる” 心疾患から身を守る

10頁でもご紹介した通り、心疾患は日本人の死亡原因の第2位を占める病気。患者数も年々増加しており、平成26年の総患者数は172万9000人に達しました。

心疾患というと「心筋梗塞」や「狭心症」といった病気につきまとう“突然死”のイメージが強いかもしれませんが、最近は診断や治療の技術が格段に進歩し、多くの患者さんの救命や予後改善に貢献しています。また、生活習慣を変えることで、発生リスクを大幅に抑えられることもわかっていますので、知識が“ある”と“ない”とでは、罹患率に大きな差が出る病気だといえるでしょう。

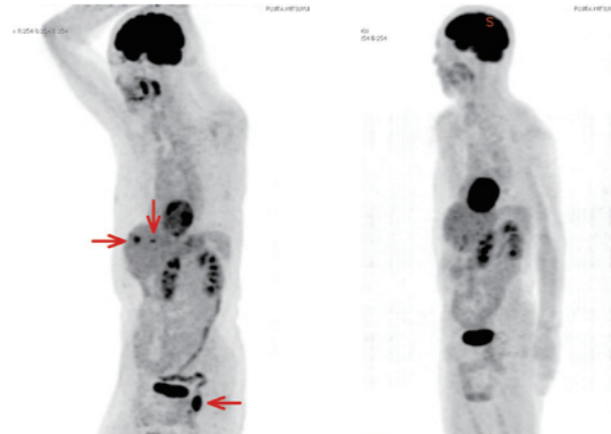
本講演では心臓病の検査や予防、治療などについてわかりやすく解説します。いざというときに慌てないためにも、ぜひ本講座にご参加いただき、心疾患についての知識を身につけてくださいますように。みなさまのお越しを心よりお待ちしております。

- ※現在、お申込みを受け付けております。
 - ※お申込み・お問い合わせは、『免疫療法コンシェルジュ』まで電話、またはメールでお願いします。
 - ※電話は03(3556)1950、メールは『免疫療法コンシェルジュ』のウェブサイト、または、『BSL-48Clinic』のホームページからお入りください。
 - ※紀尾井フォーラム、BSL-48Clinicの受付でもお申込みできます。
 - ※定員になり次第締め切らせていただきます。
- みなさまのお越しを心よりお待ちしております。**



★第12回定期健康講座は、11月26日(土)に開催を予定しています。詳細が決まりしだいお知らせします。

氏名：藤田 三幸さん 男性 62歳
 臨床診断：直腸がん、肝転移
 病理診断：Adenocarcinoma
 病期：IV
 病歴：2014.07.31 直腸がん診断
 2014.08 CTにて肝転移
 2014.09.12 Apheresis PET-CT (1): Rb rectum, liver x2
 2014.10.20 FOLFOX x4 course
 2014.10.27 DC (11/10, 11/25, 2015/02/24, 05/27, 06/24, 08/03, 09/15, 10/15, 11/12, 12/09, 2016/01/04, 02/09, 04/05, 06/08)
 2014.12.18 PET-CT (2): rectum CR, liver PR
 2015.01.13 直腸切除 (anterior resection) + colostomy
 2015.02.26 PET-CT (3): liver x2
 2015.03.11 LAK x6
 2015.03.31 肝転移切除、人工肛門閉鎖
 2015.06.03 FOLFOX (5)
 2015.12.02 PET-CT (4): normal study
 2016.02.09 Hepatitis
 2016.03.02 PET-CT (5): normal study
 2016.06.01 PET-CT (6): normal study



画像左：2014.09.12 (PET-CT) 治療前の画像で直腸の原発巣と2ヶ所の肝転移巣を認める
 画像右：2016.06.01 (PET-CT) 治療後の画像で、すでに1年以上、新たな病巣は認められない

蓮見先生の コメント

藤田さんは2014年夏に、健診で直腸がんの診断を受けました。同時に、肝臓に2カ所の転移を指摘され、他臓器転移があることから、病期は第IV期との内容でした。さっそく「おざわ」の親方の紹介で、都内の大学病院を受診されました。また同時に私にも治療方針についてご相談があり、一般治療と樹状細胞を用いた免疫療法の併用で、治療計画を進めることとなったのです。

今までの私たちのHITV治療経験から、たとえ第IV期の状態であっても、一般治療を始める前の段階から身体に特異的な免疫誘導を実施しておく、極めて予後が良く治療に至っている患者さんも多いことから、同様の方法を強くお勧めしました。

まずは直腸部の腫瘍が肛門から4cmしかなく、このまま手術になると、生涯人工肛門のままで生活することになり、すし職人という職業の上でも問題が残りました。結果的に抗がん剤と樹状細胞で縮小させると共に、ワクチン化してから切除する方向となりました。

FOLFOX (抗がん剤)を4コース使用後のPET-CTでは、順調に腫瘍縮小効果が認められ、翌年1月に直腸を切除しました。その後、2カ所の肝転移の手術は3月に行われ、定期的な画像検査においても再発病巣を認めていません。術後1年間が過ぎ、再発予防としての免疫療法を、あと2年間実施して終了予定です。以上の経験から学べることは――

- ① 第IV期の診断がついたら、一般治療より特異的な免疫誘導をまず考えること
 - ② たとえ転移巣があっても、切除できるものは、原発巣を含めて、できるだけ手術を前向きに検討すること
 - ③ 第IV期のがんは、すでにごん細胞が血液に侵入していることを意味するため、免疫力での血液浄化を優先して、それ以降の新しい転移を誘発させないこと
- ――などが、治療のためには大切だということです。

Report

第9回定期健康講座

音楽を聴いて、未病克服力を磨く

講師：埼玉医科大学 保健医療学部教授 和合治久先生

●音楽の力で免疫力を上げる

2016年4月16日(土)、東京の「紀尾井フォーラム」において、第9回定期健康講座が開催されました。講師の和合治久先生は、日本における「免疫音楽医療学」の第一人者です。
免疫音楽医療学とは、音楽がもたらす「癒し効果」を実際の医療現場で活用するための方法を解明する学問で、実際、和合先生は監修・解説を務めたCD『心と体を整える〜愛の周波数528Hz〜』などで、第57回日本レコード大賞・企画賞を受賞されています。

当日の講演では、音楽が自律神経に影響を及ぼし、免疫力を向上させるメカニズムについて、実例を挙げながらわかりやすく解説していただきました。音楽は誰でもどこでも副作用なく摂取できる「心のサプリメント」といえるでしょう。心身の健康を保持・増進させ、健康寿命を延ばすためにも、ぜひ日常生活に音楽を取り入れたい。音楽が秘める効用に、改めて気づかされた一日でした。



※この講演の様子は動画でご覧いただけます。Webサイト「免疫療法コンシェルジュ」にアクセスしていただき、「紀尾井フォーラム・定期健康講座」からご入場ください。和合先生のCDについても記しておりますので、参考にしてください。

Report

第10回定期健康講座

骨粗しょう症を治して骨折を防ぐ

講師：元東京都リハビリテーション病院院長 林泰史先生

2016年6月4日(土)、東京の「紀尾井フォーラム」において、第10回定期健康講座が開催されました。今回の講師は元東京都リハビリテーション病院院長(現・原宿リハビリテーション病院名誉院長) 林

泰史先生。東京都多摩老人医療センター院長、東京都老人医療センター(現・東京都健康長寿医療センター)院長という経歴が示す通り、老人医療のオーソリティです。

骨粗しょう症は、骨の一定の体積中のカルシウムとコラーゲンが等しく減少するだけでなく、コラーゲンも脆くなると骨強度が低下し、骨折が生じやすくなった病気。日本では現在約1270万人の患者さんがいらつしやると推定され、今後75歳以上の後期高齢者が増加することから、患者数は益々増大することが見込まれます。お年寄りの場合は、骨折から要介護状態へ移行する場面もあることから、特に注意を要する病気です。また、罹患者の7割〜8割は女性であるため、女性には「大敵」といえるでしょう。

「男性が体内に取り込めるカルシウム量はおおよそ1000g。しかし、女性は700gから800gほどしかありません。それが40歳



るわけではありませんが、(牛乳は)丈夫な骨を作るためには大変有効だと思います」

②運動——骨に適度な衝撃を与える

「米国で現役を退いた看護師3万5千人を13年間にわたって調査した結果、1週間に4時間——1日に35分程度毎日歩く習慣のある人は、(習慣の)ない人に比べて骨折のリスクが3分の2に減ったといえます。運動は筋肉を強くすることとはもちろん、負荷を加えることで骨を丈夫にする効果もあります」
林先生お勧めの運動を、上に挙げましたので、参考にしてください。

③日光に当たる——手のひらだけでも良い

日光に当たると、強い骨の形成に役立つビタミンDが活性化されます。日光というと、皮膚がんとの関連を心配される方もいらつしやると思いますが、林先生は過度に心配する必要はないと説明されました。「日光を浴びること、皮膚がんの発症とは、確かに相関関係があります。しかし、日本人のような黄色人種は、欧米の白色人種に比べて皮膚がんになりにくいとされていますので、日光を浴びないよりは、浴びる

メリットの方が大きいでしょう。夏期なら、顔と手を7分から8分程度日に当てるだけで大丈夫。ご心配の方は手のひらだけでも良いので、ぜひ日常生活に適度な日光浴を取り入れてください」

講演では、この「骨粗しょう症予防——3大原則」の他にも、効果的な薬物療法や「ふらつきをなくす方法」、健康寿命の伸ばし方など、興味深いテーマが多数語られました。林先生いわく「健康寿命を延ばし、不健康寿命を短くする」ために、大変有意義な講演だったといえるでしょう。

講演終了後、林先生から「今日の参加者は、みなさん医学知識が豊富でレベルが高いですね。大変楽しく話をさせていただきました」というお言葉を頂戴いたしました。裏方のひとりとして、とても誇らしく感じた瞬間でした。

※この講演の様子は動画でご覧いただけます。Webサイト「免疫療法コンシェルジュ」にアクセスしていただき、「紀尾井フォーラム・定期健康講座」からご入場ください。

免疫療法コンシェルジュ：
<http://wellbeinglink.com/>

転倒を防ぐ体操—2つを実行！

かかと上げ

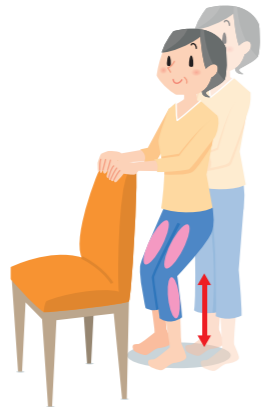


テーブルや椅子などに
つかまりながら
かかとを上げて下ろす

かかとを下ろす際、可能なら
ドシンと床に打ち付ける
…かかと落とし(骨が強くなる)

4分の1スクワット

テーブルや椅子に両手をついて
膝を軽く(4分の1)曲げて伸ばす
しっかり歩けるようになって、
膝の痛みも軽くなる



可能なら、朝夕10回ずつ

※林先生の講演スライドより

2016年

「蓮見賢一郎先生講演会」の日程

毎年、免疫療法の最新情報や、さまざまな臨床報告などをお届けしている「蓮見賢一郎先生講演会」。本年後半のスケジュールをお知らせします。“がん治療”の突破口をお探しの方にとっては、必聴の講演。ご本人はもとよりご家族、ご友人をお誘いのうえ、ぜひご来場ください。みなさまのお越しを心よりお待ちしております。

札幌講演会

Sapporo

日時：7月23日（土）

午後1時30分～午後3時30分 ※ 開場は午後1時

場所：かでの2.7 730号室

札幌市中央区北2条西7丁目 道民活動センタービル
Tel 011 (204) 5106

アクセス：・ JR 札幌駅南口から徒歩約13分
・ 地下鉄さっぽろ駅から徒歩約9分／大通駅から徒歩約11分
・ JR バス北1条西7丁目（停留所）徒歩約4分
・ 中央バス北1条西7丁目（停留所）徒歩約4分

大阪講演会

Osaka

日時：9月10日（土）

午後1時30分～午後3時30分 ※ 開場は午後1時

場所：グランキューブ大阪（大阪府立国際会議場）1101～1102号室
大阪市北区中之島5丁目3-51
Tel 06 (4803) 5585

アクセス：・ 京阪電車中之島線「中之島（大阪国際会議場）駅」
（2番出口）すぐ
・ JR 大阪環状線「福島駅」から徒歩約15分
・ JR 東西線「新福島駅」から徒歩約10分
・ 阪神本線「福島駅」から徒歩約10分
・ 大阪市営地下鉄「阿波座駅」から徒歩約15分

福岡講演会

Fukuoka

日時：11月12日（土）

午後1時30分～午後3時30分 ※ 開場は午後1時

場所：アクロス福岡 円形ホール
福岡市中央区天神1丁目1番1号
Tel 092 (725) 9113

アクセス：・ 西鉄福岡（天神）駅から徒歩約10分
・ 地下鉄空港線天神駅から徒歩約3分
・ 地下鉄七隈線天神南駅から徒歩約3分

講演はすべて入場無料です。

お問い合わせは——免疫療法コンシェルジュ
03 (3556) 1950 までお寄せください。

「免疫療法コンシェルジュ」
<http://wellbeinglink.com/>



知ることは力になる——ウェブサイト「免疫療法コンシェルジュ」をご活用ください

ウェブサイト「免疫療法コンシェルジュ」は、“がん”から回復したいと願う人のための支援・情報・交流サイトです。状況を好転させるさまざまなコンテンツが用意されており、ぜひアクセスしてみてください。携帯電話からもアクセスできますので、急に情報がほしい場合にもご利用いただけます。

コンテンツ1	各ステージごとに、最も適した治療がわかります	がんの各ステージごとに、最も適した標準治療、免疫療法を解説。2つの治療系が横断的に理解できる。
コンテンツ2	「紀尾井フォーラム・定期健康講座」を動画で受講できます	東京の“紀尾井フォーラム”で開催されている「定期健康講座」の動画を、第1回から視聴可能。現在は第10回まで収録。
コンテンツ3	「Web版 はじまりのページ」や、「健康レシピ」をご覧ください	本誌のWeb版の他、好評の“マクロビオティック・レシピ”の一覧を公開中。
コンテンツ4	治療などの疑問にお答えします	全国から寄せられたがん治療に関する疑問・質問に、医師やスタッフが回答。

◆アドレスは上記参照